

月刊「神戸っ子」昭和38年9月10日印刷 通巻30号 昭和38年9月10日発行 毎月1回10日発行

郷土を愛する人々の雑誌

神戸っ子

1963/9



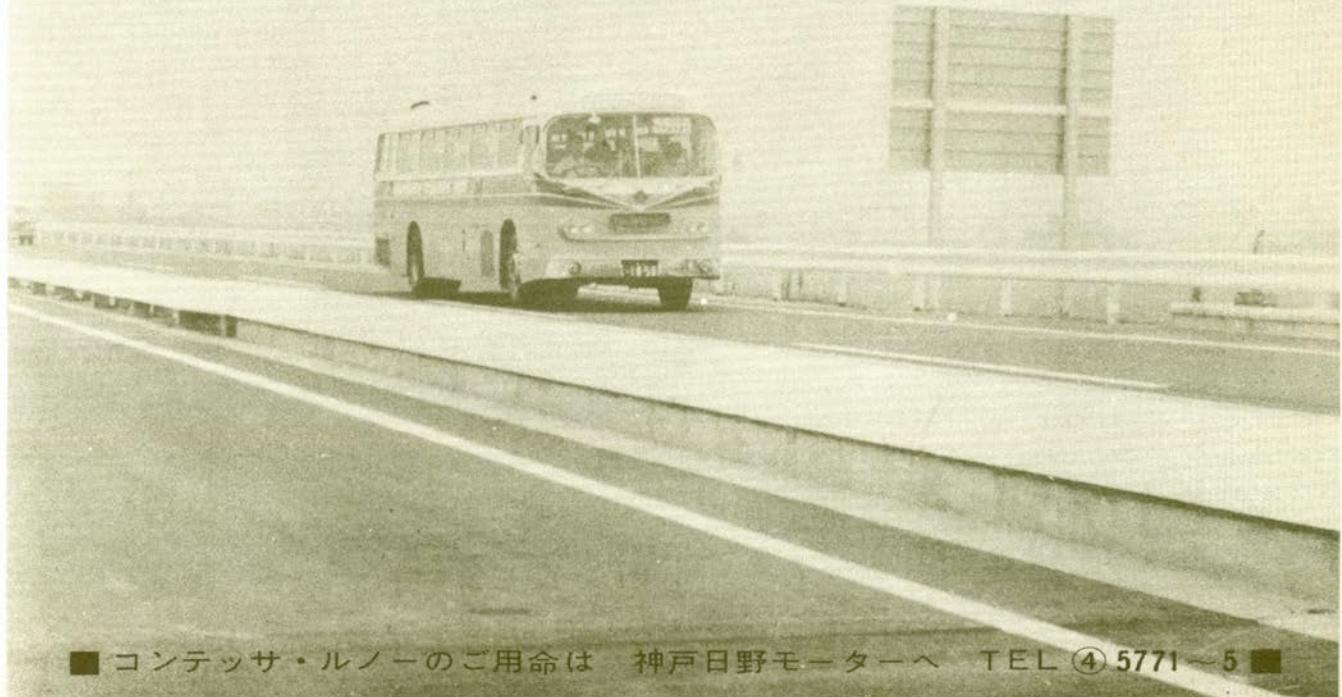
monthly magazine kobekk september 1963 no, 30
月刊 神戸っ子 1963年9月号

Hino

高性能の日野

兵庫日野デーゼル株式会社

TEL ④ 1191



■ コンテッサ・ルノーのご用命は 神戸日野モーターへ TEL ④ 5771-5 ■

これは神戸を愛する人々の手帖です

あなたのくらしに楽しい夢をおくる
神戸を訪れる人にはやさしい道しるべ

これは神戸っ子の心の手帖です



長田神社の鶏 加藤盛男（神戸史談会）

神苑に、しばしば見かける雌雄の鶏の遊んでいる風景は、参拝者の心に平和と静けさを感じさせます。

神功皇后が三輪征伐より凱旋された時、鶏聲の聞ゆる里に社を造れとの神託によりて、長田の里に奉齋せられたのが長田神社で、其の由来に基き、境内に鶏の放し飼をして居ります。鶏の玩具が有る事は余り知られていない様です。土で造った小さな雌雄の可愛い、玩具です。

九州の博多に注文して造らすとの事です。

カット・中西勝（二紀会）

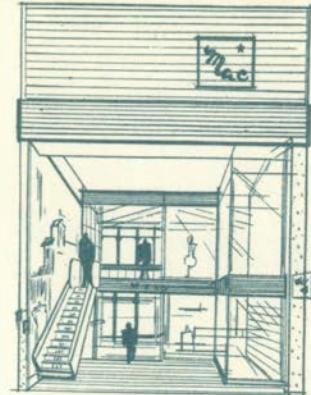
Fuchheim's

ドイツ菓子

ピラミッド
ビスケット
各種ケーキ

ユーハイム

本店・三宮生田神社西隣
神戸そごう・神戸三越・国際名菓店



newly
OPEN
新装開店 9月 20日

MAC
マック 三宮本店

SAS

のタラップのある店
売場も2倍になります
MACの夢も実現しました

?

•

- A. おしゃれな 男の 集るところ
- B. シャープな 男が さがせるところ
- C. 新らしい流行を知るところ
- D. 服飾のすべてがそろったところ
- E. それが、 MAC といううわさ
- F. そんな気持でつくりました

おしゃれ洋品の **まがらずや** 三宮本店 神戸セレクター街
トアロード店 センター街西口
新開地店 新開地本通り
姫路店 姫路駅デパート
TEL ⑧ 0895 ⑧ 0896
TEL ⑤ 7688
TEL ⑧ 1261

 **マック**

神戸ミ女性

麻鳥千穂

(宝塚歌劇団星組)

神戸市庁舎前の大通り、フラワー・ロードの南端に、新名所として、七色の噴水が誕生。神戸っ子たちは大喜びです。宝塚のスター麻鳥千穂さんも、親和学園を卒業された、神戸っ子タカラ・ジェンヌ、星組の代表スター。「こんないい噴水ができる、また神戸を自慢するタネがふえたわ」と、歌と踊りの名手もご機嫌です。



Mikimoto Pearls



真珠は花嫁の宝物です。ミキモトの粒よりのパールは、世界中の花嫁のあこがれになっています。ミキモトパールは、いつまでもかわらぬ輝きをもつ、やさしい愛のシンボルです。

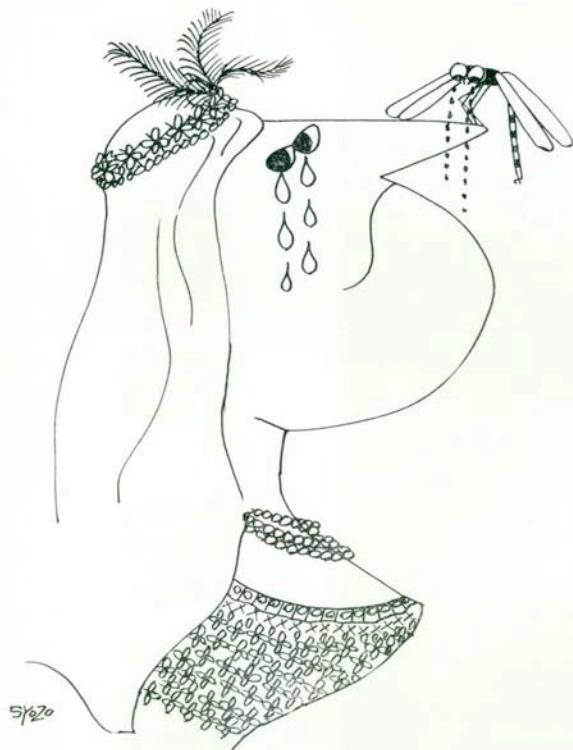


御木本真珠店

神戸店=三宮・神戸国際会館
Tel. 22-0062
大阪店=堂島・新大ビル
Tel. 361-0220

本店=東京・銀座四丁目





9月目次

- 1 長田神社の鶏／加藤盛夫・え中西勝
- 3 神戸と女性／麻鳥千穂（宝塚歌劇団星組）
- 7 連載隨想第13回／バカ＜ンス＞の旅・白川渥
- 11 れんさい隨想⑩／神戸のこと手当り次第
淀川長治
- 14 連載隨想第2回／うぐいす・阪本勝
- 19 連載第7回／神戸とエトランゼ
故郷は三つ・陳寅臣
- 25 野のはな対談・すてきなお嬢さんこんにちわ！
きく人・岡部伊都子／話す人・西村久恵
- 29 神戸遊戯誌1／ゴルフ①・青木重雄
- 30 わんぱく江戸日記／デイト・伊達俊太郎
- 32 □神戸百店会特集1□
ほくの神戸をムチャにせんといてくれ
花森安治
- 35 今秋のモード／福富芳美
- 39 暮しのアクセサリー⑥／矢野有尚
- 41 □神戸百店会特集2□座談会／花開く神戸
- 48 ピンクコーナー（T）
- 50 Autumn Bride／神戸っ子の花嫁さん
- 54 神戸うまいもん巡礼 No.13／赤尾兜子
- 56 紳士入門⑦／おしゃれ紳士・竹田洋太郎
- 58 ポケット・ジャーナル
- 60 KOBEKKO SHOPPING GUIDE
- 64 連載第5回／神戸夫人・武田繁太郎
- 67 神戸の催物ごあんない
- 68 神戸百店会だより・後記
- 表紙・小磯良平／カメラ・米田昌弘・米田定蔵
デザイン・橋昭三



コウベでみがく
世界の宝石

直輸入

神
戸
宝
石

トアロード

大丸上ル 300メートル

タニジ

③ 2397

バカ(ンス)の旅

白 川 涼
え・中 西 勝

——漸く、朝夕は少し涼しくなりましたが、ことしの夏も軽井沢に行かれましたか——

「ええ、一週間ほど軽井沢から、東京を廻って帰ってきましたが、この暑中、ゴルフ、バックをかついでネ。全く、バカンスならぬバカの旅だ。夏の旅行なんて、学生のやることですよ。家でシャワーを浴びて寝転がっているのが、最高の鎖夏法なんだが、何の因果かゴルフに取りつかれて、去年も今年もいそいそと出かけて行きました。ハハハ……我ながら若返ったもんだ」

——で、軽井沢のお宿は、今年も御親戚の石坂洋次郎さんの別荘で?

「ええ、石坂さんが今年は、僕のためにわざわざ新しい部屋を一棟建てて下さってね——それも、ゆっくり書き物も出来るようになると氣を遣つて。……友人の編集者が、『白川ホテル』が出来たじやないかなんてひやかすんだが、滞在中は、一枚も書かないで朝から晩まで、ゴルフさ。ハハハ……もともこの間に、ちょうど『吉川英治さんを偲ぶ会』が、講談社の野間さんの別荘でありますね。亡くなられた、吉川さんの誕生日が十一日なんで、去年からその日を記念して、軽井沢在住の文壇、ジャーナリストが集まることになってるんですよ」

——ことしは、どんな方々が集まられたんですか——

「勿論、主賓は吉川未亡人で、文壇関係では、石坂洋次郎夫妻、石川達三夫妻、丹羽文雄夫妻、川端康成、富田常雄、川口松太郎、井上靖、源氏鶴太、佐々木茂索夫妻、井上友一郎、柴田鍊三郎、阿川弘之、円地文子、壺井栄、芝木好子、水上勉、生沢朗、それに文芸春秋社の池島信平、講談社の野間夫妻、毎日の本田親男、朝日の扇谷正造、読売の品川主計、角川の角川源義社長等々、生前吉川さんと親しかった実業家達も参加して、勢、六十人ほども集まつたかな。広い野間別荘もいっぱいでした。これがまア前夜祭と言うことで、翌日は吉川牌を争うゴルフ大会と言うことです」

「いや、いや、ゴルフをやる者だけ、三十三人ほどです。いま言六十人の大コンペですか

つた人たちはみんなやりますがね」

——で、ハンディなどは？

「前夜祭の時、川口松太郎氏から発表されました。たとえば丹羽ゴルフ学校の校長がハンディ 0、ぼくが 20 というふうにね。これは有無を言わさぬ強引な決定です。ところが、その時、お慰みの馬券買いもやつたんだ。これは吉川さんの誕生日にちなんで十一着の馬は誰になるかと言う遊び。馬券は五百円。ぼくはたまたま隣席に居た井上友一郎君に入れた」

——で、当日の様子を？

「場所は軽井沢の新コース。ぼくの組は画壇の横綱ゴルフアーリ、生沢郎氏に、石坂洋次郎氏、それに凸版印刷の山田社長夫人。インの方から廻った。インの方がずっと難かしいんだが、ぼくのスコアはちょうど五十。ノこの分なら、優勝圏内だよ」と言われてね、それですっかり堅くなつてね、アウトを四十五六で廻るつもりのところ、とうとう五十四もたたいてしまつた。ハハハ……。

第一位は水上勉、二位は柴田鍊三郎、僕は八位。ところが、偶然競馬の方でぼくの買った馬が大穴さ。井上友一郎馬が十一着だった。第一位は井上友一郎と源氏鶴太が同点だったが、ルールによつて、年長の井上馬に決定したわけ。しかも、井上馬を買ったのは、ぼくだけだったので、五百円の馬券が、三十三人分のつまり一万六千五百円の賞金になつたわけだね。ハハハ……。」

——じや、旅費をかせいだわけですね——

「そりなんだ。受賞式のとき、みんなからひやかされたよ。井上君からは飼馬料を出せと言われるし。……彼は丹羽学校の教頭だ。優勝馬であつても、第一位などとは誰も予想しなかつたわけだね」

——その丹羽学校に入学されたでしようね——

「ええ、特別聴講生」という恰好でね。丹羽文雄校長、富田常雄、源氏鶴太らとコースを廻わつてね、最初は自己流で調子よく廻わつていたんだ。校長に負けない位とばしていたんだ。が、あれこれアドバイスを受けているうちにだんだん、判らんようになつてしまつて。……途中で、林の中に球を打ち込むことしばしば。とうとうノ

林間学校の生徒だなんてひやかされてね。……とにかく、オーソドックスの姿勢に訂正されただけでも大収穫でした。ところで、その翌日だったか、旧コースの方で、折柄、降り出した夕立の中を富田氏らとスタートしていると、神戸の懐かしい顔にぱったり出あつた。原口市長さんだ

——ホウそれは珍らしい。——

「まつたく思いがけなかつた。市長に見物されて、つい固くなつて、あまりいいショットが出なかつたがね。ハハハ……」

——帰りは、東京で又?

「いや、いや、東京は暑くてとてもゴルフなんぞ。……去年豊岡コースを岩田専太郎さんと廻つてコリゴリしたよ。山賊みたいに真黒に焼けてね。とにかく、夏の東京なんぞ一日も居るところじやない。それに、阪本前知事じやないけど、あの人間の洪水、都市の病的な膨張。近代都市として、あそこは全く行詰っていますよ。もう政治的に抜本的なメスをふるはない限りどうにもならない末世末法の感がしますね。学校官庁など移転の容易なものから、富士山麓でも移さなきア。……軽井沢で水上勉から、白川さんは、神戸に落付いているのが羨ましい、なんて言われたが田舎文士の哀悲をかこつている僕でも、羨まされることもあるんだねとにかく、われらの神戸の町も、これ以上人口の密集地帯にならんよう、中都市政策の経営を施す必要があるね」

——東京で何か?

「そうそう、某社が築地の料亭、たむらへ招いてくれた晩、編集者から、雑誌、ク神戸っ子の話が出て吃驚りしました。神戸の冊子が東京まで聞えているとは知らなかつたね。……まあ、そんなわけで、急いで東京の雑聞から脱出して来ましたが、往復の飛行機代もモウケて帰つたわけで、満更クバカの旅でもないでしよう。ハハハ……」

(作家)



確信をもってタジマの目が選んだ
世界の宝石の名品！



9月の宝石 ブルーサファイア

宝石輸入商

タジマ
TAJIMA SHOJI CO., LTD

元町2・TEL (3) 0387・2552

神戸のこと 手当り次第

淀川長治
え・中西



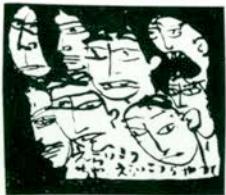
市電が湊川公園のトンネルを抜けると、空には秋の名月が輝いてそれが電車のレールに太刀魚のうろこが光っているようなその影を落していたころの、まだネオンも珍らしかったそのころ。湊川の公園近くの松竹劇場では天勝一座がアメリカから持つてかえったばかりのジャズの新曲「フウー」や「ヴァレンシア」を、ドラムの中に赤い豆電気を入れて、陽気に派手に演奏していたのであった。

その湊川公園のトンネルもまだ出来ていなかった大正五、六年ころ「湊川踊り」という、花くま、中検なかか、柳原の芸者衆総出の踊りの会が、きょうしん会と呼ばれて湊川の土手の上の公会堂のような建物のなかで催されて、各組の芸者が「みなとがわ踊り」とこんに本地で染め抜いた前かけに赤いたすきで忙しそうに招待客を二階に一階に案内し、私は母に手をつながれて、十二段がえしという春夏秋冬の踊りの、その舞台の背景が、秋の錦、たちまち雪の風景と早変

りの、春日神社の石どをろうが、バタンと音たて二つに折れるや、それがアッと見るまに松島の雪を背負った老い松に変るそれが嬉しくて。そして踊りが終るや、見物の招待客のみーんなに福引きがつたそのどかだったあのころ。

中町（なかまち）と本町（ほんまち）に常磐花壇（ときわはなだん）という料理屋があつて、まだ三つか四つの私は芸者に連れられてよくそのお座敷に行つたものである。「へい、うちのぼんでっせ」。淀丸という芸者がえらい自慢そうに私を抱いて客に見せる。不思議と私はそれをよく覚えている。当時の芸者も客も、それほど呑氣といえど呑氣。子供をつれて座敷に出て何とする。その子の中にはさんで夫婦と気どつたかどうか、たいがい私はそのまま何か喰べさせられ、ざぶとんを二つに折つて、それを枕に芸者のスソでスヤスヤと眠つて、そつと人力車でわが家へ送り戻されたらしいのであつた。

抱え主へのサーキュスか、あるいは単なる見栄か、そんなところから幼稚園のころにかけ、よく芸者に連れられ、聚楽館、松竹劇場（当時は中央劇場と呼んでいたとも記憶する）にいそいそと出かけたものである。私は、そのころ本当に子供なりに、よく売れるねえさんは面白いことをするものと感心したのであつた。もちろん自分で花をつけ自分で行くなどということは、あとで知ったのであるが、私が見とれたのは、かならず、芝居小舎にはいるまえに表の食堂に立ち寄つて、私はオムレツ、おねえさんはブドウ一酒を小さなコップにぐいと一杯あふつてから小舎にはいる。私がいそいそ連れられたのはそのオムレツのためらしいが、芸者のブドウ一酒一杯だけを、どうやら「なんで、うちだけ喰べて、あんたは喰べへんのん」と私は子供のくせにこせこせと聞いたらしい。するとその芸者が「これを呑んで、芝居を見にゆきますと、それ、ぼうーと顔が赤うなりまつしやろ、すると、えらいきれいに見えまんねん」。私は女人て、えらい氣いを使うねんなあ。僅か五つか六つの私はそれが頭によほどびりついたか、今もその白いテーブルと小さなブドウ一酒のコップが目に浮かぶほど覚えている。



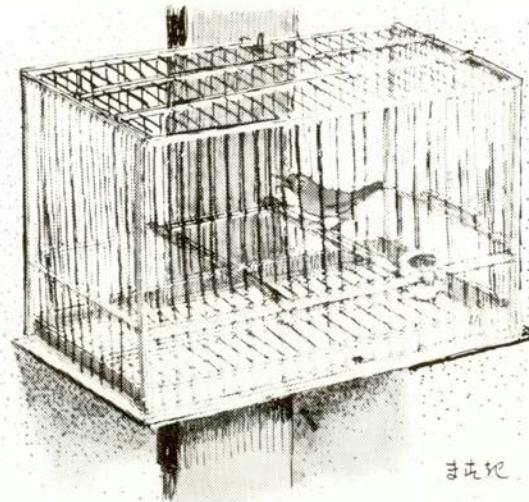
駒屋の酒まんじゅう、かいやのカヤボコ、青辰のあなごすし……といい氣で楽しんでいた大正七年ごろのその夏に「えらい、こっちやー」と誰やらがとびこんで来て「おうちと、おむかいの西田はん（西田政治氏宅）とこが危い……ちゅうことだっせ」と知らせて来た。この年の七月、富山県魚津町から始った米価騰貴の米騒動（こめざわうどう）。「鈴木商店が焼打ちやでえ、ほんまや」。私の家など焼かれたり叩きこわされたりする理由は、あるわけもない。誰かのいやがらせ。それなのに両親はびっくり仰天して、ひとまずからだけでもと兵庫の西柳原の踏切りちかくの福海寺に逃げこんで、このお寺のおっさん（僧主）のお座敷を借りて、その蚊帳の中で、母と姉二人と私。親父はわが家に居残ったのである。すると夜になつて、その福海寺の表をゴォーッという勢いのある大せいの足音、バタバタと走るぞうりの音。「焼いてこませ、叩きつぶせ」。私は手ざわり固いもめんぶとんに頭までかくして身をぢぢめた。

朝になつて木魚の音と鐘の音と読経の声で「ここは、いittai、どこ」私はやつとお寺だと思ひだし、朝のおつとめのすんだ若い坊さんのバタバタと廊下を小走りに走るのを障子も閉めていないその廊下を蚊帳の中から眺めながら、その若い坊さんが「おまえ、えらい蚊帳のなか見とつたやないか」「あほ、お前やないか、あのとうさんのケツ見とつたぞ」。私はあわてて二人の姉を見た。上の姉がおしり丸だしのその恰好。えらいこっちや、私はとび上つてその姉に夏ぶとんをひつかけた。私の十二、三のころだつたろう。

それより二年くらいまえ、と云うと私の十うくらゐのころは大正琴というのが流行し、それで何を弾いていたかといふと「愛のバラの花」。そしてそれはまさに米国南北戦争の北軍の軍歌のメロディだつたのである。湊川公園のトンネルのできる前のその土手にかかつたサークスのじんたもそのメロディ。活動写真館は連続大活劇時代。銀座の看板の上にはサークスの玉乗り男がくるくる廻る玉の上であぶなつかしく両足両手を動かしているイルミネーションがてんめつしていた。

（映画評論家）

阪
え・小
本
松
益
喜
勝
う
ぐ
い
す



また

八月十二日の早朝、ことし十八になるわが家の手伝いさん／＼松
つちやん／＼がお盆で田舎に帰った。四国の觀音寺から小さな汽船で
一時間半ばかりの伊吹島が故郷である。

何事にもよく気のつくむすめで、田舎へと心のはずむ出発のまぎ
わにも、わたしの愛鳥うぐいすの籠の掃除をし、すり餌もやり、水
浴びもさせて発つていった。

うちのうぐいすは、一日に一回餌をやり二回水浴びをさせるなら
わしから、その日は早過ぎ山妻が如露で水浴びをさせてやつた。
ところがその翌朝である。山妻が勝手もとで、しきりに何かかち
やかちやいわせて物探しをしている様子なので、朝早くから何をバ

タバタしてるんだときくと、うぐいすの餌を入れた缶が見つからない、という。そして「松ちゃんどこへおいでいったんやろ」などとぼやいている。わたしもいっしょにあちこち探してみたが、なるほどどこにも見つからない。これは困ったとわたしは思った。そしてあわてた。というのは、つぎのような経験がわたしにあるからである。

戦前東京牛込に住んでいたころ、わたしは一羽のうぐいすを飼っていた。早春から晩春にかけては、ひねもすソブランノで啼きくらし近所の人々からもお礼をいわれたほどの名鳥だった。ところがうぐいすという小鳥は夏に入るとぱたり啼かなくなる。そればかりでなく、よほど手入れをよくしても、素人は夏を越すまでに死なしてしまうことが多い。なかなかむつかしい鳥なのだ。

ある早朝のこと、わたしはすり餌をつくろうと餌の缶を開けてみると、粉末がほとんど残っていないのに気がついた。まあいいだろう、そのうち近所の小鳥屋も起きるだろうからそれからでもいいと考え、朝食をしたため新聞を読みなどして、さて小鳥屋に餌を買ひにゆこうと、なにげなく廊下の柱にかけてあつた籠をのぞいてみると、さきほどまで籠のなかでげんきよく動いていた愛鳥が眼をつぶつて横たわっている。驚いて籠から取り出し頬にあててみたが、もうおそかつた。あわれにはかない死だつた。

そのときの経験が身にしみているから、餌の缶を探しあぐんでわたしはあわてたのである。朝の六時ごろだったから、商店街の小鳥屋はまだ店を開けていないだろ。しかし店の開くまで待っていると、東京の二の舞いとなるおそれがある。しかも昨朝松ちゃんは、ついぜいより早く五時ごろに餌をやつたはずだから、うぐいすのおなかはぎりぎりに違いない。こりや危い。

わたしはそこで、山妻とむすめに、町に降りていって、小鳥屋の店を開けてもらつて、餌を買ってくれと頼んだ。しかし二人ともこころよくひきうけてくれなかつた。そこでわたしはただちに散歩着に着かえて家を出た。バスはまだ動いてない。国鉄芦屋駅そばの小鳥屋まで約二十分の道をわたしはいそぎ足で降りていつた。わ

がいとしのうぐいすを死なしてはならないと、まるで十字軍の騎士のような気持だった。

商店街はまだ眠っていた。小鳥屋の店も閉っていた。トントンと表戸をたたくと、店のなかの犬がないて、戸の裏側をがりがり爪で搔く音がきこえた。やがてねむそうな目をしておかみさんが戸を開けてくれた。わたしは朝あけに眠りをさました失礼をわび、訳を話した。ふきげんそうだったおかみさんの顔にほほえみが現われはじめた。

わたしは東京での経験を話した。そしてうちのうぐいすは一日一回餌をやるだけだとも説明した。かの女は笑いながらころよく紙袋に粉末をつめてくれた。そしていった。「うちのうぐいす仕合せやわ」

わたしはその袋を小脇にかかえて、もと来た道を上つていった。芦屋の山は朝日に輝やき、空は晴れわたっていた。

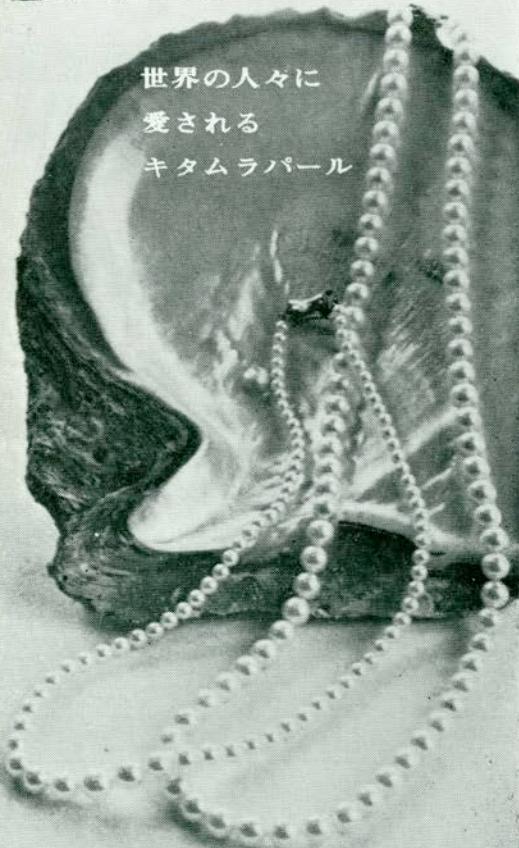
玄関に飛びこむと、わが愛鳥は元気よく籠のなかで宙返りをしていた。やれやれと胸を撫でおろした。わたしはさっそく買って来た粉末と菜の葉を磨鉢で、綠鮮やかなすり餌をつくった。山妻は籠の床を掃除した。わたしは小さな如露で冷たい水を羽根にかけてやつた。小鳥はうれしそうに水浴びした。新鮮な餌のいっぱいはいつた容器を入れてやると、先きのとがった目をきらきら光らして、むさぼるようにたべはじめた。

わたしがこんなにあわてずとも、うぐいすは死ななかつたかもしれない。しかしそうでなかつたかもしれない。それはともかくとして、わたしがいちばんうれしく思つたのは、松ちゃんの留守中に、かの女にとつても愛鳥にちがいないこの小鳥の命を守り得たことである。さびしい身の上のこのむすめが十七日に帰つてきて、もし玄関に鳥籠がなかつたとしたら、どんな思いをすることだろう。それについても、暁の五時半出発のまぎわに、いとしうぐいすの籠を掃除し、水浴びをさせ、すり餌をやることを忘れなかつた島のむすめの純情にわたしはうたれる。——八月十四日——



北村パール

世界の人々に
愛される
キタムラパール



北村真珠株式会社

神戸 / 元町2・東京 / スキヤ橋センター
TEL. (3) 0072 (571) 8032

17

第三の美谷



EYEGLASSES CREATE THE THIRD BEAUTY

ハイファッショニのめがね

神戸眼鏡院

元町3・電(3)3112-3・391443
(3) 0551 (貿易部)

〈神戸クーポン歓迎〉

お慶びの日

しあわせな愛の日に、ウェディングケーキは美しい想い出を創ります。

鳳月堂がまごころこめて作る優雅で清らかなお菓子はいつまでも喜んでいただけることでしょう。

晴れのご婚儀に、伝統と、新しい味覚を加えた鳳月堂のお菓子をお選びください。

ウェディングケー
キ・デコレーショ
ンケーキ・松竹梅
引菓子・紅白饅頭



鳳月堂

神戸 元町三丁目 TEL. 3-695-696

